

※双方記憶あり転生。ネタバレ。未来捏造。双子出産（オリキャラ）

「昔むかしあるところに、醜い嘘つきな魔法使いがいました」

魔法使いは、自分が身近にいる人たちとは違うことを知っていました。

魔法使いは、魔法使いとそうでない人たちがいることを、知っていました。

魔法使いは、自分が醜いことを、知っていました。

だから強く在ろうとしました。

正しく、美しく、在ろうとしました。

ある日、魔法使いはひとりのお姫さまに出逢いました。

強くて可愛くて、綺麗で、ちょっとお転婆で産まれたての赤ちゃんみたいな、真っ白いお姫さま。

魔法使いはお姫さまに恋をしました。お姫さまが、大好きでした。お姫さまの傍にいただけで、魔法使いは笑顔になれました。全身に力が湧いて、心が弾んで、ふたりでならどこまでも歩いていける気持ちでした。

お姫さまと一緒に居るためなら、どんな努力も惜しくなかった。苦しくなかった。辛くなどなかった。

お姫さまに好かれたくて、魔法使いはお姫さまに言葉を与え、笑顔を与え、ときにちょっと拳で語り合いました。お姫さまの目に留まりたかったのです。選んでほしかったのです。

無垢なお姫さまは、魔法使いの無二の親友となってくれました。

だけど魔法使いはお姫さまを護れませんでした。生きたいと願った小さな女の子を救えず、大好きなお姫さまは何とか助かったものの、天使へと成長していきました。そして、ひとりでどこまでも飛び立ってしまうのでした。

魔法使いは、自分が嘘つきだということを知りました。醜い、嘘つきな魔法使い。

魔法使いは、魔法使いでない人たちを護りたいと思っていました。しかし、我が身に、仲間に降りかかる災禍を、受け入れることができませんでした。

お姫さまを嫌いになったことなど、ただの一瞬だってありえませんでした。けれどもう、お姫さまの隣に居ても、魔法使いは心の底から笑えなくなっていました。



お姫さまは最強になりました。でも、それは決して、痛みを感じないということではありません。死ににくいというだけで、不死身ということでは無いのです。お姫さまはそんなことお構いなしに進んでいくから、魔法使いは、寂しかったのです。怖かったのです。もういちど、今度は本当に、お姫さまを失ってしまうのが、怖かったのです。

やがて魔法使いは、魔法使いでない人たちを殺すことにしました。そうすれば魔法使いは必要なくなります。魔法使いがそうでない人たちと同じく、平凡で穏やかに暮らせることを夢見ました。大好きなお姫さまが、使い潰されることの無い明日を、願いました。多くの仲間に慈しまれることを、愛されることを願っていました。

そのためには、お姫さまの傍を離れるしかなかったのです。お姫さまを道具のように扱うなど、魔法使いには例え自分が死んでも嫌でした。お姫さまに人殺しなどさせたくありませんでした。

お姫さまが人を殺すのは、できれば自分で最後にしてあげたかったのです。お姫さまが自分を殺すとき、どうか悲しむことがありませんように。裏切り者、死んですっきりした、と、思ってもらえますように。そして生まれ変わってもういちど逢えることがあったなら、その時はまた、友達になってくださいと、魔法使いは願っていました。

魔法使いは、自分を醜い嘘つきだと知ってなお、強く正しくいたかったのです。

そうでなければ、魔法使いは生きていけなかったのです。無力感に打ちひしがれて死ぬのは簡単でした。だけど、ただ死んでも、誰も救われないのです。声をあげなくては、誰にも届かないのです。自分が死ぬのは別にもう構わなかったけれど。当たり前前の幸福を手放してまで、見知らぬ誰かの明日のために戦った命が報われないなんて、魔法使いにはどうしても受け入れられなかったのです。

その不満を抱えたまま、何もせずに息をするだけなど、魔法使いはそんな自分を赦すことができませんでした。

例え何も成せないとしても、続く何かを遺せるのならば。せめて、何かを遺せるように、精一杯やってみよう。



「ねえパパ、魔法使いは、お姫さまにたおされちゃったの？」

「そうだよ。醜い嘘つきな魔法使いは、最期の最後で、お姫さまとまた親友になれたし、しかも生まれ変わったあとは王子さまにしてもらって、今では双子の天使たちを産んで女神さまにまでなっちゃったお姫さまに仕える、戦士にしてもらえたんだ」

「そっか、そっかあ！よかったねえ！」

「そこは王様って言えよ」

「ああ、お帰り、私の女神さまと小さな天使」

「おかえりなさいママ～」

「はいはい、ただいま。僕の魔法使いの王サマと可愛い天使くん。天使のお熱は下がったかな？」

「ただいまパパ、慈しげる。まだあつついわ、ねてなきやダメよ」

「おかえりなさい實ちゃん。ねむれなかったから、パパにおはなし、してもらってたの」

「つづきは、もっとげんきになってからよ。パパがママにプロポーズしたはなし、わたしもききたいもの」

「その日はね、はじめてママと待ち合わせをしてー」

「あーもー！ほら！！ご飯作るよ！！僕も實も手伝って！慈はできるまでちょっと寝てなさい！」

うん、だいふ熱下がってきたね。よく頑張ったね、慈。

傑、またこんな時間に任務か。はあ、なんか最近、傑に甘えてるなあ。ちょっとお灸をすえてやらないと。

そうだ實、パパが戻ってくるまで、お人形の話をしてあげようか。

頭のかたい、バカ真面目な魔法使いの手で、世界一幸せなお姫さまにしてもらった、人形のお話。